口 咽 科　2013；**26**(3)：334(A)（総会号）

111. 口腔咽喉頭領域の成人ヘルペス感染症の３例

平松　隆[1)2)]

1）ひらまつ耳鼻咽喉科
2）岐北厚生病院耳鼻咽喉科

＜はじめに＞HSV、VZVの口腔咽頭喉頭領域の感染症はいずれも一般的には小児が呈する病変なので、成人例では治療開始が遅れることも少なくない。過去１年に当院で経験した３例を提示する。＜症例＞症例１：46歳男性。近医で咽頭痛のため加療されるが摂食不能となった。全身状態も急激に悪化し起立困難となり、近病院を救急受診。血液検査で炎症所見が乏しく、耳鼻咽喉科的評価のため当院を紹介受診。咽喉頭の病変が左側のみで、VZV感染症と診断。近病院へ入院の上、アシクロビルの点滴となった。翌朝起き上がると嘔吐。髄膜炎と診断され、増量したアシクロビルの点滴が行われた。７日目に味覚障害と耳介に発疹が出現するが髄液検査結果により11日目に退院。平衡障害が続くため当院を再受診した。経過をみるが改善しないので、ステロイド剤を投与し大学病院を紹介。大学病院受診時には症状、所見とも改善していた。症例２：35歳男性。６年前にもヘルペス性咽頭炎。近医にて発熱と咽頭痛のためバラシクロビルも含む投薬がなされたが経口摂取不能となり、当院を紹介受診。全身倦怠感が強く、口腔内にアフタが多発し、喉頭浮腫も認めた。HSV感染症と診断、アシクロビルとともにステロイド剤も点滴。翌朝には全身状態も改善し飲水は可能となり、２日間アシクロビルを点滴すると摂食も可能となった。症例３；60歳女性。発熱を伴う咽頭痛、口内痛のため近医で抗生剤を中心とする治療するが無効。４日後に当院を紹介受診。扁桃炎に加え多発する口腔咽喉頭のアフタにより、HSV感染症と診断し、アシクロビルとFMOXを２日間点滴した。全身状態は改善しバラシクロビルなどの内服としたが効果が不十分で、再度アシクロビルを点滴した。10日後にはアフタはほぼ消失。＜考察＞成人では、ヘルペスウイルス感染症の疑いがあれば早期にアシクロビル点滴静注を行い、その後は慎重な経過観察にて対応するのが良いと思われた。

口 咽 科　2013；**26**(3)：334(B)（総会号）

112. 当科における小児頸部リンパ節炎の検討

○杉山喜一[1)]・山野貴史[1)]・坂田俊文[1)]・中川尚志[2)]

1）福岡大学筑紫病院耳鼻いんこう科
2）福岡大学医学部耳鼻咽喉科

頸部リンパ節炎はワルダイエル輪や頭頸部領域の粘膜に感染を起こし領域リンパ節に波及することで発症する。好発年齢は一般に10歳までの小児に多いとされ、日常診療においても小児の頸部リンパ節炎はしばしば遭遇する疾患である。時に膿瘍形成に至ることがあるが、近年の抗菌薬の進歩に伴い重篤な経過を辿る症例は減少傾向にある。膿瘍形成に至った例においても抗菌薬使用による保存加療での改善がしばしばみられるが、依然として抵抗性を示し切開排膿を要するものも少なくない。特に小児の場合では小児特有な問題点が挙げられる。成人とは異なり年長児においても本人の訴えが少なく、更に診察の面での協力が得られにくいことは日常診療でしばしば遭遇する問題である。また、低年齢であることによる抗菌薬の選択に苦慮する点、侵襲度及び処置の困難度から臨床の現場において切開排膿の時期についての判断に苦慮する点などが問題となる。今回2000年１月から2012年９月までの間で当院を受診し初診時に頸部リンパ節炎と診断し得た小児47例(男児29例,女児18例,平均年齢4.7歳)に対して年齢、入院期間、使用抗菌薬・使用日数、切開排膿の有無などに関して検討を行った。年齢分布は４歳以下において全体の59%と過半数を超える結果となった。最も使用された抗菌薬はセフェム系であり、抗菌薬使用日数については８日以内の使用が分布としては多い傾向であった。また、対象とした47例中６例において膿瘍を形成しており、そのうち４例で切開排膿切開を必要とした。